

北陸及び中国地方の甘藷栽培史(2)

元鹿児島県農業試験場大隅支場長 中馬 克己

第4章 昭和初期から終戦（昭和20年）時代

1. 政治経済、農業情勢、世相

昭和4年（1929）アメリカで世界的な大恐慌が発生し、5年（1930）には日本経済も大打撃を受けた（昭和恐慌）。農村にも深刻な影響を与え、米価も同年の豊作飢饉（作物の価額が暴落、農家の窮乏）や、6年（1931）と9年（1934）の東北地方の冷害による大凶作で、全国的に大幅に下落して農村恐慌となった。

6年に始まった満州事変は、その後12年（1937）に日中戦争に突入し、つづいて16年（1941）太平洋戦争が開始されたが、20年（1945）日本の敗戦により終結した。戦時下の国民の生活は、悪性インフレがすすみ、大変に苦しくなった。とくに食糧不足が深刻であった。内地米の減産がつづき、農村への買い出し、物々交換、闇米で飢えをしのいだ。（黛弘道他『詳解日本史B』）

2. 各県の甘藷生産状況の推移

表3と図2のとおりである。畑面積は北陸では新潟県が多かったが、昭和20年（1945）には元年（1926）の約65％に、石川県では48％に、いずれも減少した。中国では各県とも元年にくらべ80～85％に減少した。しかし、各県とも新潟県の60％前後の面積であった。甘藷の作付面積は、各県ともに20年（1945）には食糧不足の補いのため約30～60％高くな

った。しかし、鳥取県と岡山県は240～140％も高くなっている。統計資料を再調査したが間違いなかった。作付率は、各県ともに20年には約30％と高かったが、新潟県のみは約15％であった。10a当り収量は、広島県は高かったが他の県はともに低かった。なお、鹿児島県は畑面積が広くて甘藷の作付率が30～40％高く、10a当り収量も多かった。

3. 各県の甘藷栽培

(1) 品 種

農林省農務局『雑穀豆類甘藷馬鈴薯耕種要綱』によれば、大正時代からの品種と殆ど同じである。北陸の新潟県では紅赤、花魁（おいらん）などが多かった。石川県では千葉赤、金時が多く、ついで太白であった。（石川農試業務功程昭.12）。中国の鳥取県では伯州源氏、伯州赤（鳥取農試業務功程昭.15）、岡山県では源氏（元気）が60％で、ついで広島（メリケン白）であった。広島県では源氏が40％、アメリカ（七福）が30％と多く、ついで天竺、坂下などであった。なお島根県では七福（アメリカ）、四十日、源氏、埼玉花魁、川越などが栽培された。

(2) 育苗の方法

上記の要綱によれば、大正時代からの方法と殆ど同じである。北陸の新潟・石川県では3月中旬～4月上旬に藁囲いの温床を作り、藪伏せの最盛期は3月下旬であった。10a当

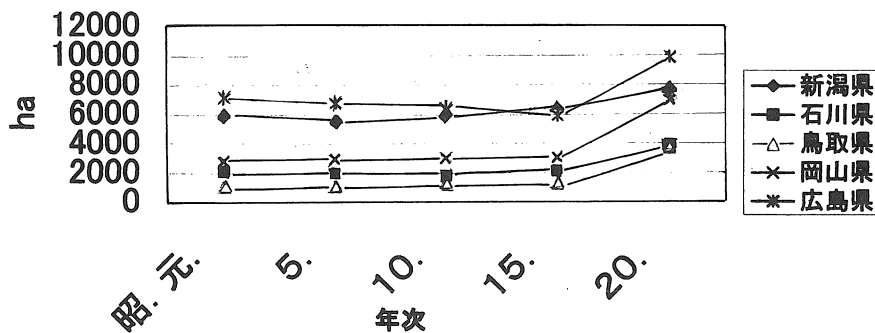
表3 昭和初期から終戦時代の北陸及び中国各県の甘藷生産状況の推移

(単位: 面積ha, 収量kg, 作付率%)

県別	調査項目\年次	昭. 元.	5.	10.	15.	20.	20/元
北陸地方 新潟県	畑面積: A	75662	60399	61120	60652	49533	65%
	甘藷作付面積: B	5993	5577	5955	6490	7748	129%
	10a当収量	627	756	771	779	483	-
	作付率 B/A	7.9%	9.2%	9.7%	10.7%	15.6%	-
石川県	畑面積: A	23525	15973	16562	16354	11328	48%
	甘藷作付面積: B	2433	2073	1994	2184	3877	159%
	10a当収量	750	882	921	951	674	-
	作付率 B/A	10.3%	13.0%	12.0%	13.4%	34.2%	-
中国地方 鳥取県	畑面積: A	15521	17683	17408	16725	12832	83%
	甘藷作付面積: B	1171	1186	1470	1384	3991	341%
	10a当収量	941	1164	1242	1053	782	-
	作付率 B/A	7.5%	6.7%	8.4%	8.3%	31.1%	-
岡山県	畑面積: A	35321	36154	36040	35269	28337	80%
	甘藷作付面積: B	2918	3018	3171	3084	7015	240%
	10a当収量	804	860	1077	1223	731	-
	作付率 B/A	8.3%	8.3%	8.8%	8.7%	24.8%	-
広島県	畑面積: A	36808	33594	33564	33216	31331	86%
	甘藷作付面積: B	7272	6839	6494	6020	9862	136%
	10a当収量	1063	1032	1278	1282	1539	-
	作付率 B/A	19.8%	20.4%	19.3%	18.1%	31.5%	-
参考 鹿児島県	畑面積: A	156813	116393	121442	122186	85773	55%
	甘藷作付面積: B	39972	37241	37731	36076	34603	87%
	10a当収量	1387	1462	1443	1278	980	-
	作付率 B/A	25.5%	31.2%	31.1%	29.5%	40.3%	-

(農水省統計情報部『都道府県農業基礎統計』昭. 58.、畑面積は本地とし、以下各年次同じとした)

図2 昭和初期から20年代までの甘藷作付面積の推移



り約6.5㎡とした。なお、苗の購入は新潟県では約7割、石川県では約4割であった。中国の岡山・広島県でも上記の同時期に、温床または冷床を作って3月下旬頃に蒔伏せした。なお、鳥取県では温床のみを利用した（鳥取

農試業務功程昭.15)。なお、各県ともに少量の苗の購入が見られた。

(3) 整地及び肥料

小野武夫『日本農業起源論』によれば、焼畑について昭和11年（1936）の記録がある。

農作を目的とするものと、造林を目的とするものがあった。中国では、新潟・石川県とともに行われ、農作の目的が多かった。中国の鳥取・岡山県でも行われたが、造林の目的が大きかった。広島県では全く行われなかった。

農林省農務局『雑穀豆類甘藷馬鈴薯耕種要綱』によれば、北陸の新潟、石川県では5月中～6月上旬に、畜力または人力で耕して整地した。畜力の割合は約2割であった。前作物がある場合は間作したが、その割合は約3割であった。肥料には元肥として堆肥、藁灰、人糞尿、過燐酸石灰などで溝施用された。一部に全面散布も見られた。岡山、広島県では大部分が麦の間作であるから、整地はしなかったが、裸地では畜力または人力で整地した。肥料は元肥として大豆粕、木灰、過燐酸石灰、下肥などを施した。

鳥取県では、前作小麦作の溝に施肥して作畦した。肥料には堆肥、硫酸、過燐酸石灰、木灰、下肥などを施した（鳥取農試業務功程昭15）。

（4） 植付けの方法、管理作業

上記の要綱によれば、各地方ともに、5月上～6月下旬（最盛期6月上旬）に畦幅60～75cm、株間30～45cmとして船底植えにした。10a当り本数はおおそ3000～5000本となった。石川県の砂丘地帯では、畦幅約120cmの複条とした。中耕除草は6月上～8月中旬に2回浅く畦間を耕して土寄せする。蔓返しは1～2回行われた。

鳥取県では前作の畦幅60cmの小麦間に高畦を作り、株間約45cmに船底植えとした（鳥取農試業務功程昭15）。岡山県では6月中～7月上旬に、畦幅約60cm、株間約30cmとして斜挿しとした。広島県では5月下～6月下旬

に、畦幅60cm株間約30cmとして斜挿しとした。中耕除草は、いずれも麦間に植付けたものは、麦刈後の7月中頃に、他は植付け後約20日後に行う。

（5） 収穫及び貯蔵、利用及び食生活

この時代までは、前記の明治から大正時代とおおよそ変わりはなかった。すなわち、北陸の新潟、石川県での収穫の時期は、10月上～11月上旬に鋤または三本鋤で行う。気候が寒冷のため、貯蔵は極めて困難である。しかし、普通には屋内の床下や炉辺に縦穴を設置して行うが、屋外の横穴または縦穴にも行う。所要種藷の約3割を行い、不足の苗は購入する。貯蔵期間は10月下～3月上旬頃までである。中国の岡山、広島県での収穫は、10月上～11月下旬に鋤または備中鋤で行う。貯蔵は屋外または屋内の床下の縦穴に行う。いずれの地方でも、内部に稲藁や籾殻などを使用した。

北陸の新潟県は米どころで、食べ方だけでも50数種類もあるという。しかし、甘藷が秋に収穫されると、朝、昼の基本食がさつまいも飯となった。皮ごと細かく切った甘藷を米と同量くらい混ぜ、水を入れ塩を一つまみ加えて炊いた（日本食生活全集15、新潟の食事）。石川県も加賀百万石といわれた米どころである。甘藷栽培は少なく、収穫時の秋から冬にご飯のかわりや間食として、蒸したり茹でたりし、塩で味付けして食べる。甘藷を丸のまませいろで蒸し、輪切りなどにして乾燥させ、干しいもとして食べる（日本食生活全集17、石川の食事）。

中国の鳥取県は海岸線が長く、漁村が多く、魚食の国といわれている。甘藷は砂浜に近いところに作付けした。蒸し煮、焼き芋に

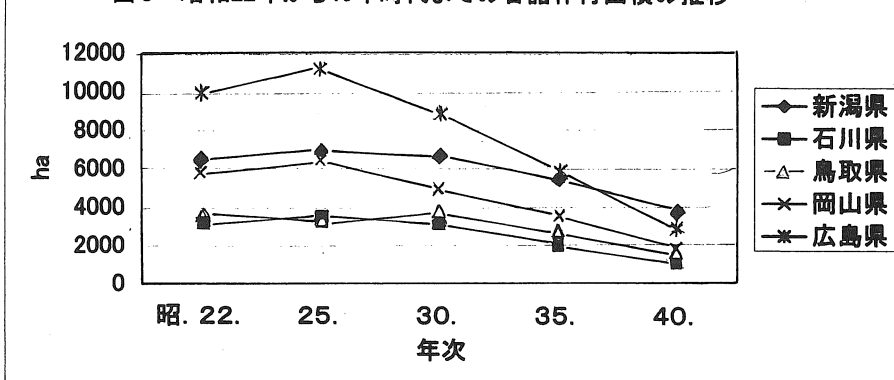
表4 昭和22年(戦後)から40年時代の北陸及び中国各県の甘藷生産状況の推移

(単位:面積ha,収量kg,作付率%)

県別	調査項目\年次	昭. 22.	25.	30.	35.	40.	40/22
北陸地方 新潟県	畑面積:A	47290	45081	43276	48100	43200	91%
	甘藷作付面積:B	6611	7080	6790	5580	3780	57%
	10a当収量	847	1369	1387	1381	1460	
	作付率 B/A	14.0%	15.7%	15.7%	11.6%	8.8%	
石川県	畑面積:A	11446	11051	11601	13700	12300	107%
	甘藷作付面積:B	3372	3610	3120	2010	1030	31%
	10a当収量	1064	1204	1518	1512	1553	
	作付率 B/A	29.5%	32.7%	26.9%	14.7%	8.4%	
中国地方 鳥取県	畑面積:A	12889	12087	12901	17200	12700	99%
	甘藷作付面積:B	3663	3540	3910	2910	1700	46%
	10a当収量	1155	1402	1537	1381	1370	
	作付率 B/A	28.4%	29.3%	30.3%	16.9%	13.4%	
岡山県	畑面積:A	29387	27133	27207	35900	34200	116%
	甘藷作付面積:B	5966	6550	5030	3620	1860	31%
	10a当収量	1051	1437	1608	1574	1548	
	作付率 B/A	20.3%	24.1%	18.5%	10.1%	5.4%	
広島県	畑面積:A	31503	25892	27747	34400	33300	106%
	甘藷作付面積:B	10063	11300	9030	5910	2980	30%
	10a当収量	1097	1397	1620	1548	1610	
	作付率 B/A	31.9%	43.6%	32.5%	17.2%	8.9%	
参考 鹿児島県	畑面積:A	87916	84027	84579	127800	125400	143%
	甘藷作付面積:B	31328	36180	51000	62600	64500	206%
	10a当収量	1087	1555	2035	2086	2110	
	作付率 B/A	35.6%	43.1%	60.3%	49.0%	51.4%	

(農水省統計情報部『都道府県農業基礎統計』昭. 58.、畑面積は本地とし、以下各年次同じとした)

図3 昭和22年から40年時代までの甘藷作付面積の推移



して朝食や間食にしたり、また、てんぷらやいもあめ、干しいもなどを作った(日本食生活全集31、鳥取の食事)。岡山県は瀬戸内海の島々、肥沃な南部平野などにより、食事の素材に恵まれている。甘藷の利用は、炊いた

いも(蒸しいも)、いも飯(米入りか、米・麦入り)、いもがゆ、煮付けいも、衣揚げ、焼き芋、切干し、いも飴などと多彩である(日本食生活全集33、岡山の食事)。広島県は瀬戸内海に157の島々を数えている。島々の日

常の基本食は甘藷となっている。収穫後から春先までは、朝飯にほとんど蒸しいものを食べる。その他の利用法は、岡山県と同様である（日本食生活全集34、広島の記事）。

第5章 昭和20年（戦後）から40年時代

1. 政治経済、農業情勢、世相

昭和20年（1945）8月15日の敗戦後、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）の指令、勧告に基づいて、日本政府が政治を行う間接統治方式がとられた。戦後の国民生活は非常に苦しく、戦争の傷跡は容易に回復しなかった。

衣食住のうち、何よりも苦しんだのは食生活であった。1日2合（0.36リットル）の主食配給も甘藷、とうもろこしなどの代用食となり、遅配・欠配が多かった。

25年（1950）年6月、北朝鮮が北緯38度線をこえて韓国に侵攻し朝鮮戦争が始まり、28年（1953）7月休戦協定が調印された。戦後深刻な不況に落ち込んでいた日本経済は、この戦争の特需景気で息を吹き返した。30～32年（1955～57）には「神武景気」と呼ばれる大型景気を迎え、日本経済は急速に成長しはじめた。

30年以後、米の大豊作につづいて食糧需給は好転した。経済の高度成長は国民の生活様式と意識を大きく変容させ、とくに農村の変化が激しかった。食生活も豊かになり、肉類や乳製品などが普及したこともあって、日本人の体格はいちじるしく向上した（石井進他『詳説日本史』、黛弘道他『詳説日本史B』）。

2. 各県の甘藷生産状況の推移

表4と図3のとおりである。

畑面積は北陸では新潟県が多かったが、昭

和40年（1965）には22年（1947）の約91%に減少した。石川県では107%に増加した。しかし、実面積は新潟の28%と少なかった。中国では40年の畑面積は、22年より鳥取県はあまり変わらなかったが、岡山、広島県などでは増加して105～116%になった。しかし、石川と鳥取県は新潟県の約28%の面積で、岡山と広島県は77～79%である。

10a当り収量は、各県ともに40年には22年より著しく高くなった。甘藷の作付面積と作付率は、各県ともに22年には食糧不足の補いのために高かったが、35～40年には食糧事情が好転し、大きく低下した。しかし、畑作地帯の鹿児島県では30年以降、逆に高くなっている。

3. 各県の甘藷栽培

(1) 品 種

新潟県に栽培されている品種には、農林1号、農林8号、沖縄100号、太白、高系14号などがある。（新潟農試年報昭31.36）。鳥取県では護国藷、農林1号、同2号、沖縄100号、七福などが栽培された。（鳥取農試業務功程佐伯分場昭26）広島県では農林1号、同2号、護国藷、沖縄100号などが栽培された。（広島農試研究年報昭27.35）

(2) 育苗の方法

北陸地方では、育苗期間が低温なために育苗が困難であったが、ビニール被覆による無加温育苗法が実用化された。他に電熱育苗もみられ、直播栽培も試みられた。（新潟県農試報告13号昭37）鳥取県ではビニール保温露地育苗が行われた。（鳥取農試業務功程昭32）広島県の島嶼地帯では露地育苗、露地ビニール育苗などが行われた。（広島県農試研究年報昭28.35）

なお直播栽培の播種期について、農林省の指導による全国的な連絡試験地の中に、新潟県と石川県が含まれていた。しかし、両県の北陸地方での播種期は明らかにされなかった、と明記されている。（農林省農業改良局研究部『甘藷直播栽培に関する研究』1955）

（3）整地及び肥料

終戦時代までの方法とあまり変わらない。北陸の新潟、石川県では5月中～6月上旬に畜力または人力で耕して整地した。畜力の割合は約2割であった。前作物がある場合は間作したが、その割合は約3割であった。肥料には元肥として堆肥、硫酸、硫酸、過磷酸石灰などか溝施用された。（新潟農試年報昭29）

鳥取県では堆肥、硫酸、過石、硫酸などが施用された。（鳥取農試業務功昭26）岡山、広島県では大部分が麦の間作であるから、整地はしなかったが、裸地では畜力または人力で整地した。肥料は前記と同様であった。（農林省農務局『雑穀豆類甘藷馬鈴薯耕種要綱』）

昭和30年（1955）頃から全国的にテラー型耕うん機が普及して、これによる作業も行われるようになった。肥料には各種のいも化成肥料が出回るようになった。（戦後農業発達史畑作編）

（4）植付けの方法、管理作業

新潟県では5月下～6月中旬に、畦幅90cm株間30cm（10a当3600本）でやや斜挿しにした。管理作業は中耕土寄せを2回行った。（新潟農試年報昭29）石川県の砂丘地帯では、畦幅約120cmの複条とした。中耕除草は6月上～8月中旬に2回浅く畦間を耕して土寄せする。蔓返しは1～2回行われた。

鳥取県では5月下～6月上旬に、畦幅1m、株間45cm、2条千鳥植えとし、斜挿しに

した。岡山、広島県については前章と同様である。

（5）収穫及び貯蔵、利用及び食生活

従来とあまり変わらない。すなわち北陸の新潟、石川県での収穫の時期は、10月～11月上旬に鋤または三本鋤で行う。気候が寒冷のため貯蔵は極めて困難である。しかし、普通には、屋内の床下や炉辺に縦穴を設置して行うが、屋外の横穴または縦穴にも行う。所要種藷の約3割を行い、不足の苗は購入する。貯蔵期間は10月下～3月上旬頃までである。中国の岡山、広島県での収穫時期は、10月上～11月下旬に鋤または備中鋤で行う。貯蔵は屋外または屋内の床下の縦穴に行う。いずれの地方でも、内部に稲藁や籾殻などを使用した。

食生活は、戦後（1945）から数年は食糧事情が悪く、主食として米、麦、粟、黍、甘藷などを混合して食べた。米の割合は地域や家によって差があった。戦前から続いて非農家には米のほかに麦、脱脂大豆などが配給された。そこで、農家に買い出しに出かけて衣類などを米・雑穀・野菜などと物々交換した。幸いにも、24年（1949）ころからアメリカから援助物資として小麦粉、とうもろこしの粉、粉ミルクなどが配給され栄養失調も少なくなった。30年（1955）以降は水稻の豊作が続き、学校給食も行われるようになった。一般でも白米食が主食となり、さらにうどん、そば、パンなどが主食の主流となった。甘藷は間食などに利用されるのみとなった。

副食は、大抵の家が味噌汁、漬物、梅干、煮付け、和え物、その他に魚類の煮物、塩干魚、貝類、海藻類、それに肉類では鶏肉、豚肉、牛肉などが利用された。さらに食生活が

豊かになり、豆腐、油揚げ、魚介類、肉類、卵などがよく利用された。その他各種加工食品の利用が多くなり、栄養バランスを保つために果物類も増加しつつあった。（豊川裕之『昭和の食の変遷』、中馬克己『日本甘藷栽培史』）

第6章 昭和40年後半から60年時代

1. 政治経済、農業情勢、世相

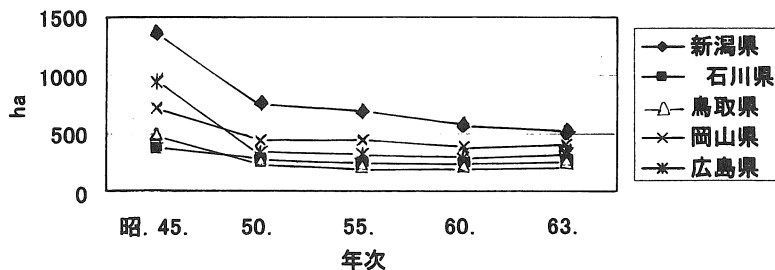
国民総生産（GNP）は、43年（1968）にはアメリカに次ぐ第2位の規模に達した。農耕の機械化と農村生活の近代化が進む一方、過疎化の進行が農村の共同社会としての機能を衰弱させた。また米をわずかな例外として、日本の食糧自給率は急激に低下した。49年（1974）には経済成長率はマイナスとなり、翌年以降も2～5%の水準にとどまった。日本の食生活は豊かになり、肉類や乳製品が普及

表5 昭和45年から63年時代の甘藷生産状況の推移
(単位: 面積ha, 収量kg, 作付率%)

県別	調査項目\年次	昭. 45.	50.	55.	60.	63.	63/45
北陸地方 新潟県	畑面積: A	32400	27200	25000	23500	23100	71%
	甘藷作付面積: B	1380	776	716	594	539	39%
	10a当収量	1427	1443	1389	1420	1420	-
	作付率 B/A	4.3%	2.9%	2.9%	2.5%	2.3%	-
石川県	畑面積: A	10600	9530	10000	9750	9350	88%
	甘藷作付面積: B	393	288	252	272	272	69%
	10a当収量	1669	1718	1658	1650	1680	-
	作付率 B/A	3.7%	3.0%	2.5%	2.8%	2.9%	-
中国地方 鳥取県	畑面積: A	16400	15300	14900	14100	14000	85%
	甘藷作付面積: B	511	288	251	240	284	56%
	10a当収量	1489	1621	1470	1630	1680	-
	作付率 B/A	3.1%	1.9%	1.7%	1.7%	2.0%	-
岡山県	畑面積: A	28600	24600	22200	18900	18700	65%
	甘藷作付面積: B	720	435	459	399	414	58%
	10a当収量	1513	1650	1409	1550	1700	-
	作付率 B/A	2.5%	1.8%	2.1%	2.1%	2.2%	-
広島県	畑面積: A	32500	27600	25500	21500	20600	63%
	甘藷作付面積: B	944	351	335	369	380	40%
	10a当収量	1652	1641	1510	1640	1720	-
	作付率 B/A	2.9%	1.3%	1.3%	1.7%	1.8%	-
参考 鹿児島県	畑面積: A	113300	99500	96900	91600	91100	80%
	甘藷作付面積: B	47700	21800	21400	22300	20900	44%
	10a当収量	2190	2240	2330	2730	2510	-
	作付率 B/A	42.1%	21.8%	22.1%	24.3%	22.9%	-

(農水省統計情報部『都道府県農業基礎統計』昭. 58.、農水省『いも類の生産流通に関する資料』平成2年)

図4 昭和45年から63年時代までの甘藷作付面積の推移



し、日本人の体格はいちじるしく向上した。
（石井進他『詳説日本史』）

2. 各県の甘藷生産状況の推移

表5と図4のとおりである。畑面積は北陸では新潟県が多かったが、昭和63年（1988）には45年（1970）の約71％に、石川県では88％に、いずれも減少した。中国の鳥取県では、85％に、岡山、広島県では63～65％に減少した。しかし、各県とも新潟県の60～80％の面積であった。

甘藷の作付面積と作付率は、各県ともに50年（1975）には食糧が充分となり、ともに大きく低下し始め、63年（1988）の作付率は2％前後になった。10a当たり収量は、各県とも年次変化は少なかったが、いずれも鹿児島県の60～80％であった。なお、鹿児島県の甘藷の作付率は22～24％と非常に高かった。

3. 各県の甘藷栽培

以下は、アンケート結果を主体にして述べる（表6、表7）。

（1）品 種

新潟、石川県では農林1号が多く、さらに農林5号、紅赤、高系14号、コガネセンガン、ベニコマチなどが栽培された。鳥取、岡山、広島県などでも上記のほかに農林2号が栽培された。さらに、広島県では農林3号、8号、ベニコマチなども栽培された。

（2）育苗の方法

露地育苗、電熱の温床育苗、またはハウス内のビニール育苗などが行われている。広島県ではウイルス無病苗の利用もみられているが、その他は普通の苗である。新潟県では苗の専門農家より購入もなされている。1本あたりの価額は10円前後である。

（3）整地及び肥料

ほとんど麦間苗は見られない。裸地の耕耘

表6 アンケート回答を寄せた機関、並びに甘藷主産地

県 別	機 関 名	主 産 地
新潟県	農業総合研究所 園芸研究センター	新潟市 豊栄市
石川県	農業総合研究センター 砂丘地農業試験場	金沢市 内灘市 宇の気町 志賀町
鳥取県	園芸試験場 砂丘地農業研究センター	米子市 境港市
岡山県	岡山市農協 西大寺支所	岡山市 倉敷市
広島県	農業技術センター 野菜栽培研究部	福山市 沖美町 大垣町

（主産地は農水省『いも類の生産流通に関する資料』平. 12.）

表7 昭和40年代及び60年代の甘藷奨励品種

県 別	年 次	品 種 名
新潟県	昭. 40年代	沖繩100号、農林1号、8号、10号、高系14号、太白
	昭. 50～60年代	紅赤、高系14号、ベニコマチ
石川県	昭. 40年代	農林1号、太白、高系14号
	昭. 50～60年代	なし
鳥取県	昭. 40年代	農林1号、高系14号
	昭. 50～60年代	なし
岡山県	昭. 40年代	農林1号、2号、護國、ヤケシラズ
	昭. 50～60年代	なし
広島県	昭. 40年代	農林1号、2号、護國、セトアカ
	昭. 50～60年代	高系14号、ベニコマチ

（農林省『甘しょの生産流通に関する現状』昭. 44. 47. 50.、農水省『いも類の生産流通に関する資料』昭. 58. 60. 63.）

表8 昭和55年から60年時代の甘藷用途別消費状況

(単位:量目トン、比率%)

県別	項目\ 年次、比率	昭.55.	比率	58.	比率	60.	比率	63.	比率
北陸地方 新潟県	生産量	9950	100	9270	100	8430	100	7650	100
	農家保有量	7861	79	7667	83	6845	81	5501	72
	市場販売量	1493	15	1047	11	1076	13	1690	22
	減耗	596	6	556	6	509	6	459	6
石川県	生産量	4180	100	4390	100	4490	100	4570	100
	農家保有量	1917	46	2216	50	2125	47	2010	44
	市場販売量	2263	54	2147	49	2310	52	2560	56
	減耗	0	0	27	1	55	1	0	0
中国地方 鳥取県	生産量	3690	100	4180	100	3910	100	4770	100
	農家保有量	3177	86	3152	75	3105	79	3290	69
	市場販売量	402	11	778	19	610	16	1250	26
	減耗	111	3	250	6	195	5	230	5
岡山県	生産量	6470	100	7090	100	6180	100	7040	100
	農家保有量	5230	81	6200	87	5380	87	5326	76
	市場販売量	980	15	568	8	551	9	1434	20
	減耗	260	4	322	5	249	4	280	4
広島県	生産量	5060	100	5930	100	6050	100	6540	100
	農家保有量	3255	64	3828	65	3993	66	4565	70
	市場販売量	1340	27	1555	26	1377	23	1045	16
	減耗	465	9	547	9	680	11	930	14

(農水省『いも類の生産流通に関する資料』昭. 57. 60. 62. 平. 2.)

注1:農家保有量は食用、飼料用、種子用などである。

注2:市場販売量はほとんど県内のみであった。

整地は、他の作物と併用する耕耘機やトラクタを利用する。岡山、広島県などでは、耕耘機が主に使用されている。全く人力や畜力の利用はない。肥料の施用は化成肥料の全面散布が多い。岡山県では単肥の利用も見られている。土壌消毒・施肥・作畦マルチのトラクタによる一貫作業機の利用はあまり見られていない。鳥取県では一部行われている。

(4) 植付けの方法、管理作業

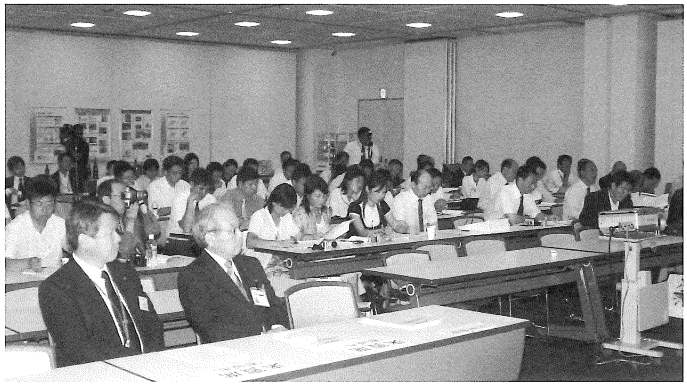
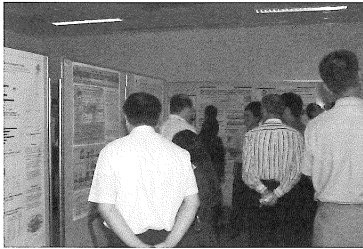
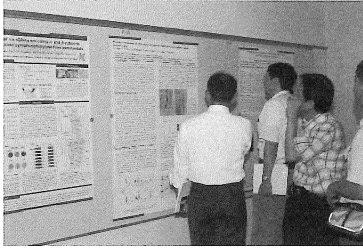
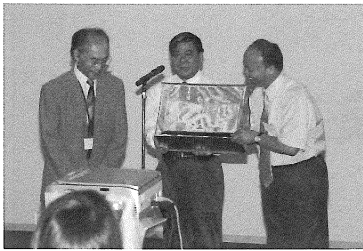
作畦マルチ作業はトラクタで行われているが、岡山、広島県などでは人力作業であった。植付け時期は、新潟県の早掘栽培は4月下旬～5月上旬にマルチをおこなった。全般に普

通栽培は5月中旬～6月下旬の植付けで、高畦栽培のみであった。畦幅と株間は75～80cm×30～45cmと各県によって多種類で、2条植えは見られなかった。植付けは人力のみであった。管理作業として中耕除草が行われ、追肥、農薬散布などはほとんど行われなかった。

(5) 収穫及び貯蔵、利用および食生活

収穫は9月下旬～11月上旬に行う。蔓を鎌で刈り取り、マルチを人力で除去し、諸は鍬で掘り取る。トラクタでの収穫も見られている。貯蔵は農家の床下、地下の縦穴、地上式の恒温貯蔵庫（共同利用など）、広島県では

23ページ下欄へ



東アジアサツマイモ研究者のつどい 平成18年9月13日から15日にかけて、日本、中国、韓国のサツマイモ研究者が宮崎県都城市に集いました。中韓両国代表から（独）九州沖縄農業研究センターの山川所長に記念額が贈呈され、特別講演につづき口頭・ポスターでの研究発表と熱心な質疑応答があり、またエクスカーションでは市内のサツマイモ関連施設を見学しました。（第92号1～3ページ参照）

畑内の諸壺にも貯蔵した。利用の多くは自家の食用であったが、一部は県内に青果用、加工用として販売されている。

なお、農水省の資料による各県の用途別消費状況は表8のとおりである。農家の保有量は、北陸の新潟県では70～80%と高かったが、石川県では44～50%と低かった。市場販売量は新潟県では11～22%で、石川県では逆に49～56%と高くなった。中国の鳥取県と岡山県の農家の保有量は、約70～87%と高く、広島県では64～70%とやや低かった。市場販売量は鳥取県、岡山県などでは10～26%だったが、広島県では16～27%とやや高かった。

食生活は、一般に白米食が主食であるが、その他にパン類、インスタント食品が利用された。副食には魚類、肉類、卵、野菜類、インスタント食品や半加工食品、または既製品を利用する家庭も多くなった。50年（1975）以降、夫婦共稼ぎ、単身赴任者、一人暮らしの若者などが増え、手軽に食べる外販物を利用する人が多くなってきた。そのため、コンビニエンスストアとかファーストフードショップなどが繁栄してきた。（土田茂『インスタント時代の食品加工』、豊川裕之『昭和の食の変遷』）

（つづく）